

さあ、私が今あなたにしてほしいことを記そう。礼拝に集まった時には、各々、全ての
人にとって役立つものを準備しなさい。つまり、詩編を歌うこと、教えを説くこと、物語
を宣べ伝えること、祈りを導くこと、洞察力を養うことを、それぞれ備えて集まることに
しなさい。

——コリントの信徒への手紙（一） 14章26節

マルコが伝えた「良い知らせ」

——マルコ伝福音書 訳述——

川上直哉

神様の わが子と慈しみなさる 尊き方、
私たちを助ける人 イエスと呼ばれたキリストの、
その「良い知らせ」の そのものの物語。

過ぎ越し祭り 3

朝になりました。少なく見積もっても13人が、ベタニアのイエス様の友だちの家を出ました。このおうちの人々は、一所懸命努力しましたが、きっと、朝ごはんに困ったことでしょう。こんなに大人数の食事の用意をすることは、経済的にも、とても大変なことです。正直に言えば、みんな、まだお腹がすいているままに、出立となりました。イエス様はまたエルサレムに向かって、同じ道を進まれました。そして見てみると、昨日のイチジクの木が、根元から枯れてしまっていました。あ、と、思い出してペテロがイエス様に言いました。「先生、見てください。あのイチジクです。先生が呪っておられましたから、なんと、枯れてしまいました。」すると、少し悲しげな真剣さを顔に満ちさせて、イエス様はこう言いました。「神様から来る真実な思いを心の中にしっかり持ってごらんください。そうすれば、こうしたことは、起こるものです。」

——そう言えば、イエス様はこんなことも言っていました。

「アメン！あなた方に言うておきます。誰であっても、この山に向かって『動け、海の中に飛び込め』と言い、その時に心の中に一片の疑いも持たずに、

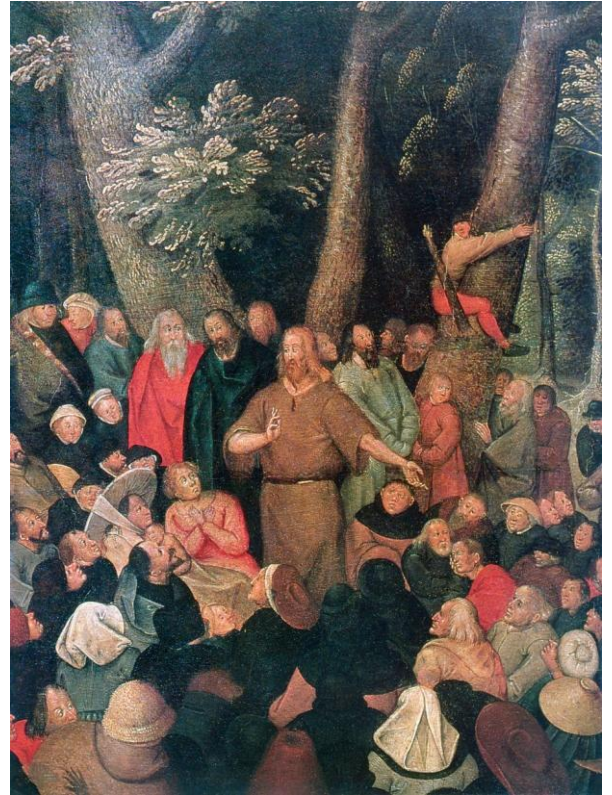
それはその通りなるのだと信じ切っているなら、その人にとって、それはそのようになるのです。」

「だから、あなたたちに言うておきます。何であれ、祈ったことについては、その願い事の全てについて、『聞き入れられたのだ』と思いなさい。『かなうのだ』と思いなさい。」

「そして、いいですか、しっかり立って神様に祈るときは、まず何よりも、自分自身を良く点検しなさい。だれかに含むところがないかどうか。もし何かあれば、何であれ、それを水に流してしまいなさい。天にいるあなたの御父上様（神様）は、あなたの過ちも、赦してくださるでしょう」

——イエス様も、人の子です。お腹が減れば、イライラする。そして、昨日は「あの出来事」の直前で、心中深く激しておられました。そうした中で出てくる言葉は、イチジクの木も枯らす。首都機能をマヒさせる。人が神さまの思いに突き動かされて発する言葉は、恐ろしいほどの力を持っている。そのことを目の当たりにして、おじ惑うお弟子さんたちに、イエス様は大事なことを、もう、充分に、語って聞かせていたのです。

そうして一行はエルサレムの町に入りました。もう、昨日までとは全く違うエルサレムです。その中心部である神殿は数千人の人々によって占拠され、これまでの商売は禁止されました。今、ここは本当に、「すべての民の祈りの家」となったのです。神殿には神殿警察がいましたが、誰も、もう、何もできませんでした。ただ、イエス様とその仲間が、この神殿を開放し、管理するようになっていました。その様子を確認するように、イエス様は神殿の中を歩きました。そんなイエス様の所に、「長老・祭司長・学者」と呼ばれた人々（つまり、イエス様の時代のイエス様の国で権力を分け合っていた人々のすべて）がやってきました。この人たちは、イエス様に言いました。「こんなことして、いいと思っているのか！そもそも、誰の許可を取って、こんなことをしているのか？」イエス様は、こうお答えになりました。「では、私も一つ、質問しましょう。もしお答えいただけるなら、こんなことをしていいのかどうか、私も答えます。」そして、イエス様は一つの質問をしました。「私の師匠・ヨハネのことです。彼がしていた『沈めの儀式』も、ずいぶん大きな運動になりました。あれは、天が（つまり神さまが）下さったものだったのでしょうか。それとも、だれか偉い人が考え出したものだったのでしょうか——お答えいただけますか？」



「長老・祭司長・学者」と呼ばれた人々（つまり、イエス様の時代のイエス様の国で権力を分け合っていた人々のすべて）は、互いに話し合い始めました。そして困ってしまったのです。「いったい、何と答えたらよいのだろう。もし、『あれは天が（つまり神さまが）くださったものだった』と言え、あいつは『それなら、どうして信じなかったのか』と追及してくるぞ。でも、『あれは、単に人が思いついたものにすぎない』と、そんな本当のことを言ってしまったら、どうなるだろう・・・。」この世界には、一つの道理があります。「死ねば終わり」とか「生き残らなければ無駄」という道理です。その道理に従って、最善の答えを出す。それが「長老・祭司長・学者」と呼ばれた人々（つまり、イエス様の時代のイエス様の国で権力を分け合っていた人々のすべて）のしてきたことでした。そのことに、この人々は全力を注いできたのです。その為だったら、誰かを犠牲にしても「しょうがない」。それが道理というものです。でも、「沈めの儀式」を行ったヨハネは、それをひっくり返しました。それで、「犠牲」にされた人々・世の中の矛盾と不条理のしわ寄せを一身に引き受けさせられた人々は、自分たちを追い詰める「道理」を蹴飛ばしてくれるヨハネの「沈めの儀式」に期待をかけた。「この人こそ、本物の預言者（神さまの言葉をもって現れた人）だ」と、熱狂した。「でも、本当は、あれだって、ヨハネの『生き残り戦略』に過ぎなかった、みんな、騙されているのだ！・・・」と、そう思っている心の中を語ることは、とても勇気のいることです。そんなことをしたら、今、同じ期待をもってイエス様を見ている数千の人々（もっと多くいたかもしれません）を、一斉に敵に回すことになる。そうなん

たら、自分たちは負けてしまう。殺されてしまう。そうなったら、おしまいだ——それが、「長老・祭司長・学者」と呼ばれた人々（つまり、イエス様の時代のイエス様の国で権力を分け合っていた人々のすべて）の「道理」です。だから、結局、この人たちはイエス様にこう言いました。

「よくわかりませんな。」

それで、イエス様もこの人たちにこう言いました。

「では、私も、こんなことをしてよいのかどうか、お話ししないことにします。」

——そう言えば、イエス様はこんなことも言っていました。

「ある人が、葡萄畑を作った。」

この一言で、聞いていた多くの人の顔が陰しくなりました。イエス様の周りにいる人々は、病気の人が多かった。生活が苦しくなって、体調を崩した人がほとんどだった。病気になっても休むことができないで、体を壊していた。それは、この「葡萄畑」のせいだ、という人が、イエス様の周りにたくさんいたのです。

「葡萄畑を作るために、その人は、植えた葡萄を囲うため、延々と柵を巡らせました。」

やっぱり！と、聞いている人々の目が、少し大きくなりました。身に覚えがあるのです。

・・・先祖伝来の土地があった。それを大切な畑にして、おじいさんも・お父さんも生活をして、俺を育てた。

いつ頃からか、でも、「ローマ帝国」とか「ヘロデ王」とか「神殿」とかいふ偉い人たちが、税金を寄こせと言い出した。毎年、畑でできるものの半分以上をもっていくという。それは「私たちが平和に暮らすため」なのだという。拒否する人も、村にはいたけれど、みんな、殴られたり、殺されたりした。だからしょうがない、その通りにしていた。でも、ある年に雨が降らず、畑に実がならなかった。みんな蓄えていたものを食べて次の年を待つことした。でも、その年も「ローマ帝国」も「ヘロデ王」も「神殿」も、当たり前のようにやってきた。「税金を寄こせ」という。「ない」と言うと、「その蓄えがあるじゃないか」と言ってきかない。「これは渡せない、家族が死んでしまう」と頑張る

と、その税金取りはにっこり笑って、「じゃあ、この土地をよこせ」と言う。
「だいじょうぶだ、この土地を、もっと儲かる場所にしてやる。そこでお前は働けばいい。きちんと、給料はやろう。そうしたら、もう自分で考えなくていい。言われた通り働けば、今よりずっと、豊かになるぞ」と、気持ちの悪い優しい声で、税金取りはそう言った。

「そうか」と思った。それが間違いだった。俺がばかだった。当座の食料を確保するために、先祖伝来の土地を渡してしまった。土地は「葡萄畑」に変わった。汗水たらして働いても、食べ物一つできない場所に、そこは変わった。その葡萄はワインに変わる。そして、ワインの値段が変わるたびに、俺たちの給料も変わる。だいたい、給料が増えるなんてことは、ほとんどなかった。ひどい時は「仕事はない」の一言で、手ぶらで帰ることになる。でも、その土地は本当は、俺たちのものだった。おじいさんのもの、お父さんのものだった。何でこんなことになるかと、腹が立って、腹が立って。

ある時、近くの村で、事件が起こった。「葡萄畑」に放火があったという。全部燃やして、土地を取り返そうと、事件を起したやつがいた。やったのは、俺もよく知っている男だった。その男は、つかまって殺された。

そして、「葡萄畑」になったあの場所、「俺の土地のはずの場所」には今、「どこかのだれか」によって、ぐるっと柵が建てられた。「俺の土地だったはずの場所」に、俺は、もう、立ち入ることもできなくなった。・・・

「それから、葡萄を絞ってワインにするための大きな装置を据え付け、見張りの塔を建て、農民を雇い、そして、その人はいなくなりました。」

もう、聞いている人の心は、遠く自分の故郷の悲しい光景でいっぱいになっています。・・・俺が育ったあの美しい畑は、見るも無残な別物になった。俺に優しくったあの土地は、俺を見張ってこき使う恐ろしい場所になった。そんなひどいことをした「どこかのだれか」は、また次の場所へ行って、同じことをして回るのだ。・・・

「それから、4年の時が経ちました。その葡萄畑の主人は、雇った農民のところへ、部下を送ってきます。最初の収穫の年ですから、本当は自分で行きたかったのですが、手が回らなかったのです。とにかく、最初の収穫をきちんと絞って、ワインに変えるために、所定の場所へ、運ばなければならなかったのです。」

・・・ともかく、四年間、働いた。上がったたり下がったりする給料に苦勞させられながら、必死で働いた。葡萄ができた。でも、またあの「税金取り」と同

じ顔をした連中がやってきた。今度も優しい顔をしている。あいつら、また、やってきた・・・。

「でも、その部下たちは、手ぶらで帰ることになりました。農夫はその部下たちを殴り、追い返したのです。」

・・・そうだ！

そうだ！

やってしまえ！・・・

「葡萄畑の主人は、やっぱり手が回らないので、しょうがない、また別の部下を、もう一度送ってきました。でも、その部下もまた、手ぶらで帰ることになります。今度は頭を殴られ、顔に大きな傷をつけられ、そして、とても口では言えないような徹底的な屈辱を味あわされて（わかる人は、どうぞ、想像してください）。」

・・・ん、まずいな。怒りが加速して、抑えが利かなくなっているぞ。

これは、まずいことになる。

でも、なんだか、いい気分だ。

そうだ。そうして当然だ！・・・

「それで、葡萄畑の主人は、今度は複数の部下をまとめて送ってきました。そうすると、待ち構えていた農夫たちは、その部下たちに襲い掛かり、まず一人を殺し、それから他の部下たちも殴って、そして何人も殺してしまいました。」

・・・おお！そうか。みんな団結したか。

畑を取り返すんだ。故郷を取り返すんだ！・・・

「この葡萄畑の主人は、ずいぶん人の好い性格でした。きっと何か思い違いがあるに違いないと、農夫たちのことを考えて、そして息子に言いました。

『困ったことになった。私の思いが伝わらないようだ。お前、行ってくれるか？』この主人には一人しか息子がいませんでした。ですから、この主人は息子をとても大切に思っていました。そのことは評判になっていたのです。だから、このひとり息子を送れば、自分の思いも伝わるだろうと、この主人は考えたのでした。」

・・・ん？ と、いうことは・・・

「しかし、農夫たちはそう考えませんでした。息子がやってきたので、農夫たちはとりあえずお迎えし、そして話し合ったのです。『あれを殺そう。そうしたら、うまくいくと、この土地は俺たちのものになる』。』」

・・・そうだ。俺たちの相続に関する法律では、
「土地は息子が相続する。
所有者が死んで息子がいない場合、
その土地の所有権を最初に宣言したものが、
その土地を所有する」と決まっている。
これは、千載一遇のチャンスだ。まだ葡萄の収穫もできていない土地だ。
「どこかのだれか」も、きっと、あきらめるに違いない。
やれ！
先祖伝来の土地を、取り返すんだ！・・・

「農夫たちは、この息子を殺しました。そして、その死骸を葡萄畑の外に投げ捨てました。鳥や犬がやってきて、その遺体を食い荒らすに任せたのです。」

ここでイエス様は、一息を入れて、周りを見渡しました。物語の中に引き込まれた人々が、いろいろな顔をしています。興奮している顔、無表情の顔、そして、青ざめている顔です。

「さて、その後、どうなったと思いますか」

と、イエス様は話を続けました。

「葡萄畑の主人は、この農夫たちに、何をするでしょうか。この農夫たちのところへ軍隊と一緒にやってきて、そしてこの農夫たちを殺すでしょう。そして、別の農夫を雇って、この葡萄畑を任せることにするでしょう。」

――世の中の矛盾の犠牲になった人々と向き合い、毎日病人をいやし、食事を与え、病気にならないように生活を立て直すこと、そのために心持を整えることを教え続けたイエス様です。この世の中の矛盾は、痛いほどよくわかっていました。

そして、その矛盾に本能的に気づいて「何とかしてほしい」と、世直しを願う人々の思いも、よくわかっていました。

でも、イエス様はその人々の思いにくぎを刺していたのです。結局、そうした「正義」を求める思いは、悲劇を生み、悲劇に終わる。正義を求めたはずの

人々によって、何の罪もない「ひとり息子」が惨殺されて、そしてすべてが破壊されて終わる。

世の中の矛盾は、どこまでも巨大に私たちを飲み込んでいる。

では、どうしたらよいのか。

神殿は、今、転覆しました。「宮清め」が行われた。世の中に矛盾を拡散する大きな震源地が、一つ、変えられた。それはまるで、主人の「ひとり息子」を迎えた葡萄畑のようなものです。葡萄畑の主人は、農夫たちと「ひとり息子」が話し合ってくれることを期待している。

さて、どうなるか。

イエス様は知っていました。「ひとり息子」は、殺される——でも、イエス様はその先を見ていました。そして、こんなことを言ったのでした。

「旧約聖書の『詩編』のギリシア語訳には、こう書いてありましたね。読んだことがあるでしょう。」

投げ捨てられた 石がある。

大工が捨てておいた石。

うち捨てられた その石が

礎石となって 支柱を支える。

頭石（かしらいし）となり アーチを支える。

これは不思議な出来事だ

私たちにはわからないこと

成し遂げたのは

「主」と名乗られる 聖書の神様。

実際、「長老・祭司長・学者」と呼ばれた人々（つまり、イエス様の時代のイエス様の国で権力を分け合っていた人々のすべて）は、イエス様を逮捕しようと真剣に検討をしていました。でも、数千人の人々がイエス様を守っています。恐ろしくて、どうにもできませんでした。それは一つには、このたとえ話が「自分たちを当てこすっている」と気づいたから、でもあったのです。

それで、イエス様のことはそのままにして、とりあえずその場から、その人たちは離れたのでした。